

稚兒塚古墳

— 第 1 次 発 掘 調 査 報 告 —

1994年

立山町教育委員会



卷首回版 1 植兒塚古墳全景



卷首図版 2 墓丘全景（西から）

序

文化財は、祖先の営みを私達に伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく現在の文化を理解するためにも重要なものです。中でも、埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鏡であると言えましょう。

このたび調査の行われた稚児塚古墳は、富山県内最大の円墳として著名であり、周濠など外部施設のそろった県内唯一の大型円墳としても広く知られていました。

また、地域住民からは地区の歴史の象徴として親しまれて、大切に保護されてきた古墳もあります。

今回の調査では、周濠・葺石の存在が改めて確認されたばかりでなく、墓道や石垣状遺構といった全国的にも貴重な遺構が検出され、稚児塚古墳の重要性が再認識されました。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際して御援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査に御協力いただいた地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

1994年3月

立山町教育委員会

教育長 金川正盛

例　　言

1. 本書は、平成5年度に国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて実施した、富山県中新川郡立山町浦田に所在する椎児塚古墳の緊急発掘調査報告である。
2. 調査期間は、平成5年8月21日～11月4日までの延27日間である。発掘面積は約180m²である。
調査期間中は、地権者をはじめ地元の方々から多くの御協力を得た。記して謝意を表します。
3. 調査事務局は立山町教育委員会におき、社会教育課主事三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長岡上寛が監修した。
4. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典、立山町教育委員会学芸員瀬戸智子である。
5. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示を得た。また、調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表します。
富山考古学会会長淡晨、大手前女子大学教授秋山進午、立命館大学教授和田晴吾、富山大学教授宇野隆夫、岸本雅敏、松島吉信（以上富山県教育委員会文化課）、桃野真晃・山本正敏・久々忠義、岡本淳一郎（以上富山県埋蔵文化財センター）、舟崎久雄（富山県公文書館）、北野博司・安英樹（以上石川県立埋蔵文化財センター）、豊中市教育委員会主任学芸員柳本照男、上市町教育委員会主事高慶孝、鹿西町教育委員会主事安井重幸、福井市教育委員会主事坂経志
6. 遺物の注記は「T C Z」とし、次にグリッド名、層位、日付の順に付した。
7. 遺物整理・実測・製図は、三鍋・瀬戸が中心となり、高橋浩二（富山大学大学院生）、大野淳也・松田樹美・海道順子、武川昌明・中田書矢・松原和也（富山大学学生）が協力した。
8. 本書の編集・執筆は三鍋・瀬戸・高橋が担当した。執筆分担は各文末に記した。

目　　次

	頁
I　遺跡の位置と周辺の遺跡	1
1. 立山町の歴史及び地理的環境	1
2. 古墳の立地	1
II　調査に至る経緯	3
III　調査概要	3
1. 墳丘と周塚	3
a. 墳形と規模	3
b. 層位	4
2. 莽石	4
3. 墓道	4
4. 石垣状遺構	5
5. 配石造構	5
6. 中世掘状遺構	5
7. 出土遺物	8
a. 土器	8
b. 石器	12
IV　調査成果	16
参考文献	17

挿 図 目 次

	頁
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	2
第2図 地形と区割図.....	折込み
第3図 調査区全体図.....	折込み
第4図 1段目テラス周辺実測図.....	折込み
第5図 塗丘裾部配石遺構実測図.....	折込み
第6図 遺物実測図.....	6
第7図 遺物実測図.....	7
第8図 遺物実測図.....	8
第9図 遺物実測図.....	13
第10図 遺物実測図.....	14
第11図 遺物実測図.....	15

図 版 目 次

	関連頁
図版1 遺跡周辺航空写真(1) 昭和63年撮影	1
図版2 遺跡周辺航空写真(1) 昭和36年撮影	1
図版3 雅児塚古墳航空写真 (富山県公文書館提供)	3
図版4 調査前全景.....	3
図版5 塗丘斜面配石遺構.....	5
図版6 塗丘裾部配石遺構.....	5
図版7 中世橋状遺構.....	5
図版8 塗丘完掘全景.....	3~5
図版9 1段目テラス周辺近景.....	3~5
図版10 石垣状遺構.....	5
図版11 調査区全景.....	3~5
図版12 1. 抜張区全景 2. 調査全景.....	3~5
図版13 遺物写真.....	8
図版14 遺物写真.....	8~10
図版15 遺物写真.....	11
図版16 遺物写真.....	11
図版17 遺物写真.....	10~11
図版18 遺物写真.....	11~12

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 立山町の歴史及び地理的環境

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、南北約21km、面積は308km²である。

地勢は、三角洲や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。東南部には立山を主峰とする北アルプスの山々が連なり、中央部はそこから続く山地丘陵もしくは河岸段丘・北西部が平野部である。

このため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面からは大きく4区分できる。

標高400m以下は暖温帯の照葉樹林帯に属し、かつて重要な食糧資源であったカシ類が多い。

これに統いて標高600m～700mまでは、暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食糧資源であるクリ・コナラ・クヌギ類の成育帶で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物が育つ場でもある。

さらに標高1,500mまではブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500m以上は亜寒帯針葉樹林帯となっている。

立山町が人々の活動の舞台になったのは、現在知られている限りでは、今から約2万年前、平野部の南に隣接する高位河岸段丘上に立地する吉峰遺跡においてである。以後、旧石器～縄文時代には東部から東南部にかけての丘陵上、弥生～占墳時代には北部のデルタ地帯が人々の活動領域となり、古代以降は活動領域が平野部から丘陵部全域へと広がっていった。

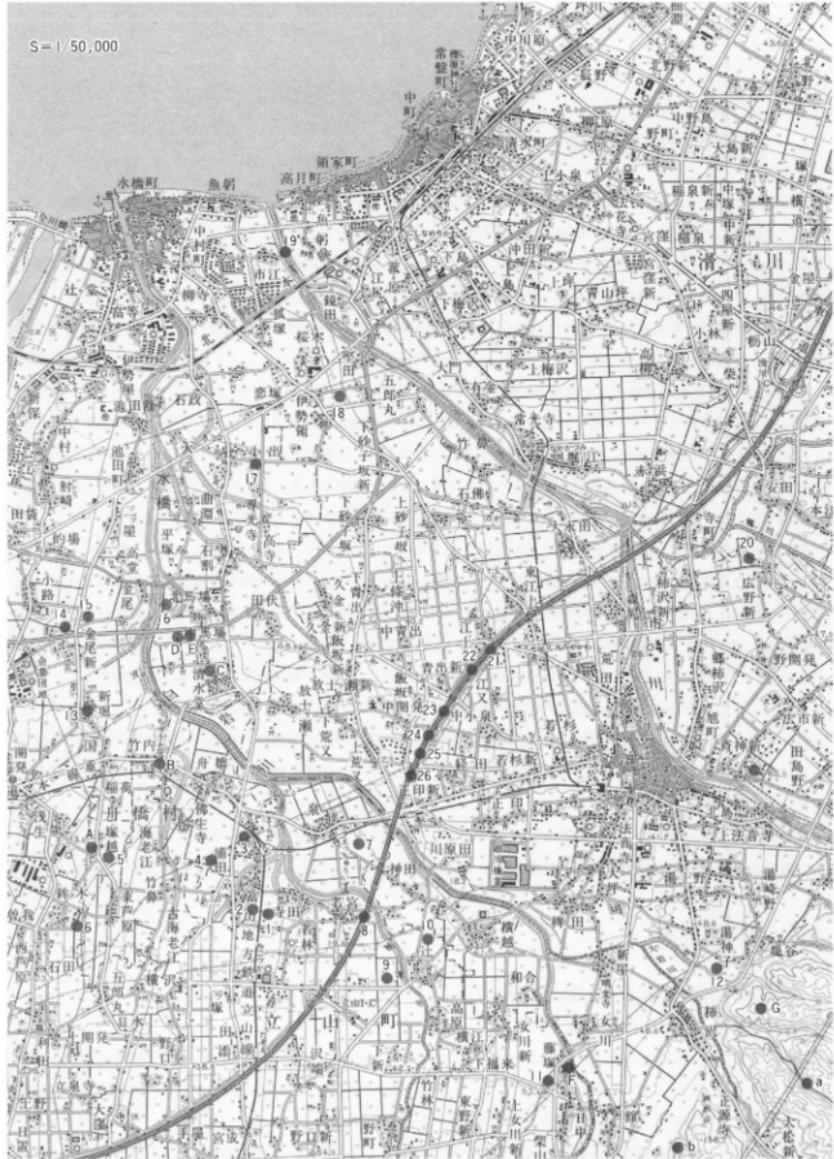
2. 古墳の立地（第1図、図版1・2）

今回調査を行った稚児塚古墳は、町の北東部新川地区に所在する。このあたりは、大地形的には常願寺川扇状地扇端部湧水地帯にあたり、そこに柄津川・白岩川などの中小河川が流入して、三角洲・小支谷・自然堤防等の複雑な地形を形成している。このため一帯は、古来から水稻耕作に適した地域として開発が進んでおり、水量豊富な河川を利用した水上交通・水運も発達していた。

周辺には縄文時代から近世に至る多数の遺跡が存在するが、特に水稻耕作が生活の中心となった弥生時代以降、その数が激増し、江上A遺跡のような大規模な集落も多数出現する。

これらの遺跡の中で稚児塚古墳に関連があるものとしては、塚越、竹内天神堂、清水堂、宮塚、若王子、藤塚などの古墳と、柿沢、齊神新に所在する古墳群、浦田前田（縄文時代～近世）、浦田（縄文時代～近世）、浦田西反（弥生時代～近世）、塚越I（縄文時代～近世）、鉢ノ木I（縄文時代～近世）、泉藏留（弥生時代～近世）、若宮B（縄文時代～近世）、辻向田（縄文時代～近世）、辻（弥生時代～近世）、日中源兵衛腰（弥生時代～古墳時代）、湯神子A（縄文時代～近世）、新堀（縄文時代～近世）、中野（縄文時代～古墳時代・中世）、金尾新西（弥生時代～中世）、金尾（縄文時代～中世）、小出城跡（古墳時代・古代）、小池（弥生時代～古墳時代・古代）、魚船（弥生時代～古墳時代）、本江広野新（弥生時代～古墳時代）、江上A（弥生時代）、江上B（弥生時代～古墳時代）、飯坂（弥生時代）、中小泉（弥生時代）、下経田（弥生時代・中世）、正印新（弥生時代～古墳時代）の各遺跡があげられる。

このような環境の中で、古墳は白岩川の支流である寺田川左岸の微高地上に立地し、また浦田前田遺跡のほぼ中央に位置する。



第1図 雅見塚古墳の位置と周辺の遺跡

1. 雅見塚古墳
 2. 浦田前田遺跡
 3. 浦田遺跡
 4. 浦田西反遺跡
 5. 球越I遺跡
 6. 鉢ノ木I遺跡
 7. 泉藏遺跡
 8. 若宮B遺跡
 9. 向田遺跡
 10. 江田遺跡
 11. 日中源兵衛腰遺跡
 12. 湯神子A遺跡
 13. 新堀遺跡
 14. 中野遺跡
 15. 金尾新西遺跡
 16. 金尾遺跡
 17. 小出城跡
 18. 小池遺跡
 19. 魚駒遺跡
 20. 本江広野新遺跡
 21. 江上B遺跡
 22. 江上A遺跡
 23. 飯坂遺跡
 24. 中小泉遺跡
 25. 下経田遺跡
 26. 正印新遺跡
- A, 塚腰古墳
B, 竹内天神堂古墳
C, 清水堂古墳
D, 宮塚古墳
E, 若王子古墳
F, 藤塚古墳
G, 柿沢古墳群
H, 齊神新古墳群
a, 亀谷窪跡
b, 中山王窪跡群

II 調査に至る経緯

稚兒塚古墳に関する最初の文献は、東大寺正倉院に伝わる天平宝字3年(759)の「越中国新川郡人藏開田地図」であり、この図中にある「大江辺墓」が稚兒塚古墳であるとする考えがある〔石原 1956〕。

最初の考古学的調査は明治年中に行われており、明治40年に吉田文俊、同41年には坪井正五郎が古墳墳丘の南西部を調査した。この発掘の痕跡は現在も残っているが、墳丘盛土内から縄文時代の大石棒と環石が発見されただけで、古墳に関連した遺構は発見されなかった。なお、この調査に関連して、明治41年8月14日の富山日報に「坪井博士稚兒塚談」という記事が掲載されているので、以下に概要を載せておく。

「……前略……稚兒塚は土地の人が考定せる如き宗良親王の塚などとは固より受けられぬ附会説でズット占塚時代の遺蹟であると思はれます……中略……何分外部の観察のみにて無論断言は出来ませんから内部の調査と併せて観察しなければ何とも云い兼ねます。併し日本に存在せる他の古墳の例によれば此種類の塚の内部には石棒や石棺のある場合が多く……中略……兎に角も内部を調査しなければ確たることは申されぬ、若し発掘でもなさる場合には東南の方より採りを入れて何にか突き当たるものあればそれを便りに掘り探る下ぐる方を順序といたしますふ々」

昭和30年代、米永雅雄が古墳を訪れ、墳丘の周囲をとりまく水田について、周濠の痕跡であろうと指摘した。

昭和53年、は場整備に先立って予備調査が行われ、周濠が存在することと、その境界が周囲水田の輪郭とほぼ一致することが確認された。ただし、調査範囲が限られていたため、古墳本体に関連する遺構は検出されなかった。なお遺物は縄文土器・弥生土器・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸などが出土している。

昭和63年、当古墳を含む町北西部の遺跡詳細分布調査が実施され、古墳が油田前田遺跡の中心に立地することが明らかにされ、また報告書では北隣の他の円墳との比較検討がなされている〔田島 1988〕。

平成4年夏、墳丘への進入路の改修と周濠部水田における宅地造成の計画が提出された。これを受けて、町教育委員会では駐教育委員会・地元地権者との間で協議を重ねた結果、平成5年度に国庫補助をうけ、古墳の内容確認のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、8月21日～11月4日の延べ27日間にわたって実施した。今回の調査は、墳丘及び周濠の状況確認が主目的だったので、発掘区は墳丘の西側に幅約4mのトレンチを設定して行った。発掘面積は約180m²である。

III 調査概要

1. 墳丘と周濠（第2・3図、図版3）

a. 墳形と規模（第2・3図、図版3）

調査前の知見では、稚兒塚古墳は円墳で、裾部での直径は南北45.2m×東西46.0mを測る。周濠と概略一致すると考えられている水田〔久々 1978〕の幅は、狭いところで約16m、広いところで約23mであり、これを含めた直径は南北89.0m×東西91.4mを測る。また、水田面からの比高は7.3～7.4mである。

墳丘は、ほぼ平坦な微高地に、盛土によって築かれている。2段目平坦面より上は遺存状態が良くないが、3段築成である可能性が高い。1段目斜面には葺石が施され、2段目斜面に相当する部分には石垣状の遺構が築かれている。また、1段目斜面の外側には、地山削り出しによる幅約35cm、高さ約15cmの基壇が付く。古墳の規模を考える場合、墳丘の基底ラインをどこに求めるかにより、規模が左右される。1段目葺石基底までを本来の墳丘であると考えるならば直径46m（推定）となり、基壇を含めると直径46.7m（推定）となる。また、今回の計測結果によれば、墳頂端部の標高は20.7m、1段目葺石基底の標高は14.4mで、墳丘の高さは6.3mである。ただし、先述した通り、2

段目平坦面より上は遺存状態が良くないため、墳丘高はより高くなるものと推定する。

周濠は、断面形が幅広の逆台形状を呈し、西端に幅約1.6mの一段深い溝状部分がある。底面の標高は13.5~13.6mで、一段深い溝状部分の標高は13.3mである。周濠の斜面は両側とともに途中で屈曲しており、どの箇所を上端とするか微妙なところであるが、調査区西端地山平坦面から斜面への変換点を周濠外側端とすれば、1段目葺石基底ラインまでの幅は16.8mとなり、周濠を含めた古墳の規模は79.6mとなる。ただし、周濠外に外庭部の付く可能性もあり、古墳の規模はさらに大きくなることが考えられる。

b. 層位（第3図）

墳丘上の土層は基本的に上層から、第1層—表土、第2層—礫混り暗茶褐色土、第4層—黄茶褐色土、第5層—地山となっており、第4層—黄茶褐色土が墳丘盛土である。なお1段目テラスから2段目テラスにかけての部分では、第2層と第4層の間に第3層—砂質暗茶褐色土が存在する。

第2層は多量の遺物を包含しているが、層下半からの出土遺物は殆どが中世のものであり、この時期に盛られた土層と考えられる。また、第3層からも中世を主体とした遺物が出土している。なお、第4層からは弥生時代後期の土器が出土しているが、これは古墳築造以前に存在した集落（浦田前田遺跡）の遺物と考えられる。

周濠内の土層は上層から、第1層—表土、第2層—礫混り暗茶褐色土、第3層—黒褐色土、第5層—砂質暗茶褐色土、第5層—黑色土と茶褐色土の互層、第6層—粘土質暗茶褐色土、第7層—地山となっている。第3層と第5・6層には腐食した植物遺体を大量に含んでおり、第3層は中世に掘られた溝内の、第5・6層は古墳周濠内の堆積土層と考えられる。なお、第3層と第4層からは、中世を主体とした遺物が出土している。

2. 葦石（第3・4図、図版8・9）

芦石は、1段目斜面に施されており、深さ40~150cmのところで検出した。上面には黒色土と茶褐色土の互層が堆積し、その上を礫混り暗茶褐色土・表土などが覆っている。最も状態の良い箇所では1m²あたり約45個の石が置かれており、遺存状態は良好といえよう。石材は、全て常願寺川系の河原石とみられる円礫が用いられている。石の大きさは、幅35cm前後の大きなものから、幅15cm前後の小さなものまでがある。

斜面全体の長さは約2m、高さは約1.2mを測る。傾斜角は、下側斜面が約20°で上側斜面が約40°と、途中で角度が変化する。このような条件から、横方面の芦石区画石列は、根石列を含めて2列はあるものと思われたが、調査では根石列を検出するにとどまった。また、縱方向の芦石区画石列は、根石列直上的一部分と、傾斜角変換点から上方の一部分とを検出できたにすぎない。このように部分的な検出状況であったため、芦石区画石列の存在は確認できたが、規模・形状までは確認するにいたらなかった。

3. 墓道（第3・4図、図版8~11）

墓道は、1段目テラス上、深さ50~70cmのところで検出した。上面には砂質暗茶褐色土が堆積している。黄茶褐色土（=墳丘盛土）の盛土によって築かれており、方位はN-80°-Wを測る。道は、テラス西端より約1m東の位置から緩い角度をもって始まり、途中で傾斜を強めて立ち上がって上部平坦面へと至り、東端は石垣状遺構にあたって終わる。規模は、基部長3.4m、同幅2.3m、上部平坦面長2m、同幅1.5mで、テラス面との比高は15~30cmを測る。

今回の調査区では、2段目斜面に相当する箇所に後述する石垣状遺構が築かれている。このため、1段目テラス面と2段目テラス端部との比高は約60cmとなっており、これは普通に歩いて登るのは難しい高さといえよう。一方、墓道上部平坦面と2段目テラス端部との比高は40cm弱で、歩いて登り易い高さとなっており、この遺構を墳頂部に至るための墓道と推定する根拠となろう。

なお、墓道東端直上には、大きめの円礫で築いた石段状遺構が存在した。この遺構は、石の下に上面堆積土（砂質暗茶褐色土）が入り込んでいたため、現場では後世の遺構と判断したが、墓道の機能と併せて考えると、あるいは墓

道に伴う遺構の可能性もある。

4. 石垣状遺構（第3・4図、図版9・10）

1段目斜面には通常の葺石が施されていたが、2段目斜面に相当する箇所からは石垣状遺構を検出した。上部には砂質暗茶褐色土が堆積する。遺存状態はたいへん良好である。石材は、葺石と同様、全て常願寺川系の河原石とみられる円礫が用いられている。石の大きさは、幅40cm前後の大きなものから、幅15cm前後の小さなものまでがある。施工方法は、やや小型（幅25cm前後）の円礫を使用した基石列を設け、その上に3～4段の石を小口積する。石は、基石列と3段目石列には小型（幅25cm前後）のものが使われ、2段目と4段目の石列には大型（幅30cm以上）のものが使われている。特に、2段目石列には幅40cm前後と最も大型の石が用いられている。

なお、調査最終段階で一部分を断ち割って断面を観察した結果、石・粘土等による表込めは認められなかった。

5. 配石遺構（第5図、図面5・6）

墳丘斜面配石遺構（図版5）

墳頂付近と斜面中位付近の2箇所で、砂質暗茶褐色土の上面から、配石遺構を検出した。深さは10cm前後で、これは表土の直下にある。石材は、常願寺川系の河原石とみられる円礫が用いられている。石の大きさは、幅10～25cm程度である。

墳頂付近の配石は、小型（幅20cm以下）のものが主に使われており、横位の石を縦列に並べるように置いている。

斜面中位付近の配石は、やや大型（幅20cm以上）のものが多く使われている。積み重ねるように集中して置くのは一箇所のみで、全体としては散在に近い状態で置いている。

なお、今回の調査以前に葺石とされていたのは、これらの配石であろう。

墳丘裾部配石遺構（第5図、図版6）

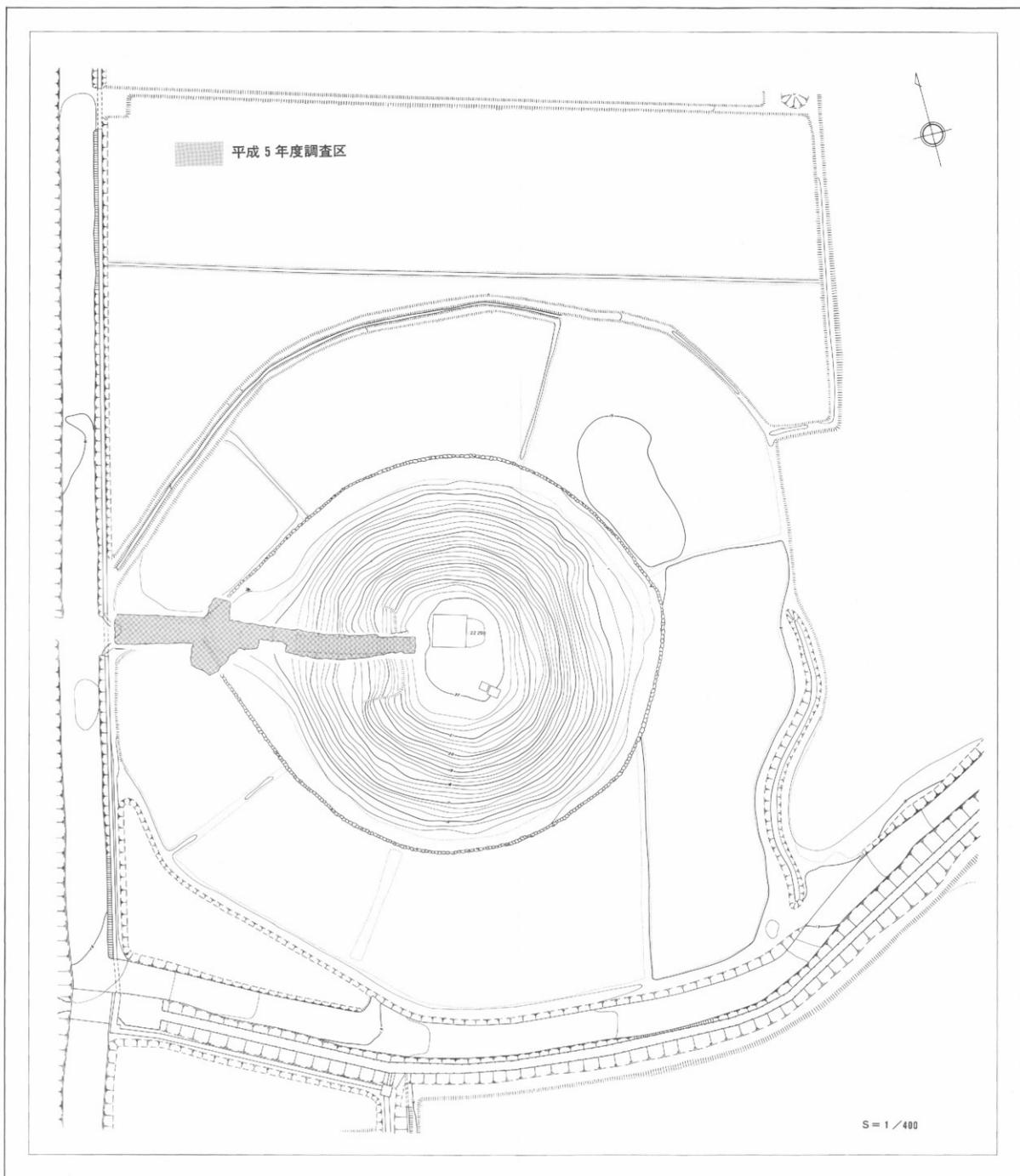
墳丘の裾部（周塗上）で、砂質暗茶褐色土の上面から、配石遺構を検出した。深さは表土から70～80cmを測る。長さ約5m、幅約2m、高さ約30cmの範囲に、円礫が列状に配されており、当初は古墳の造出部と誤認した。石材は、やはり常願寺川系の河原石とみられる円礫が用いられている。石の大きさは、幅10～30cm程度である。

石の間などから、珠洲焼・土師質土器が出土しており、中世の遺構と考えられる。中世から近世にかけて、古墳墳丘が砕等に転用された例が多く見られ、稚兒塚古墳も同様な変遷をたどったものであろう。

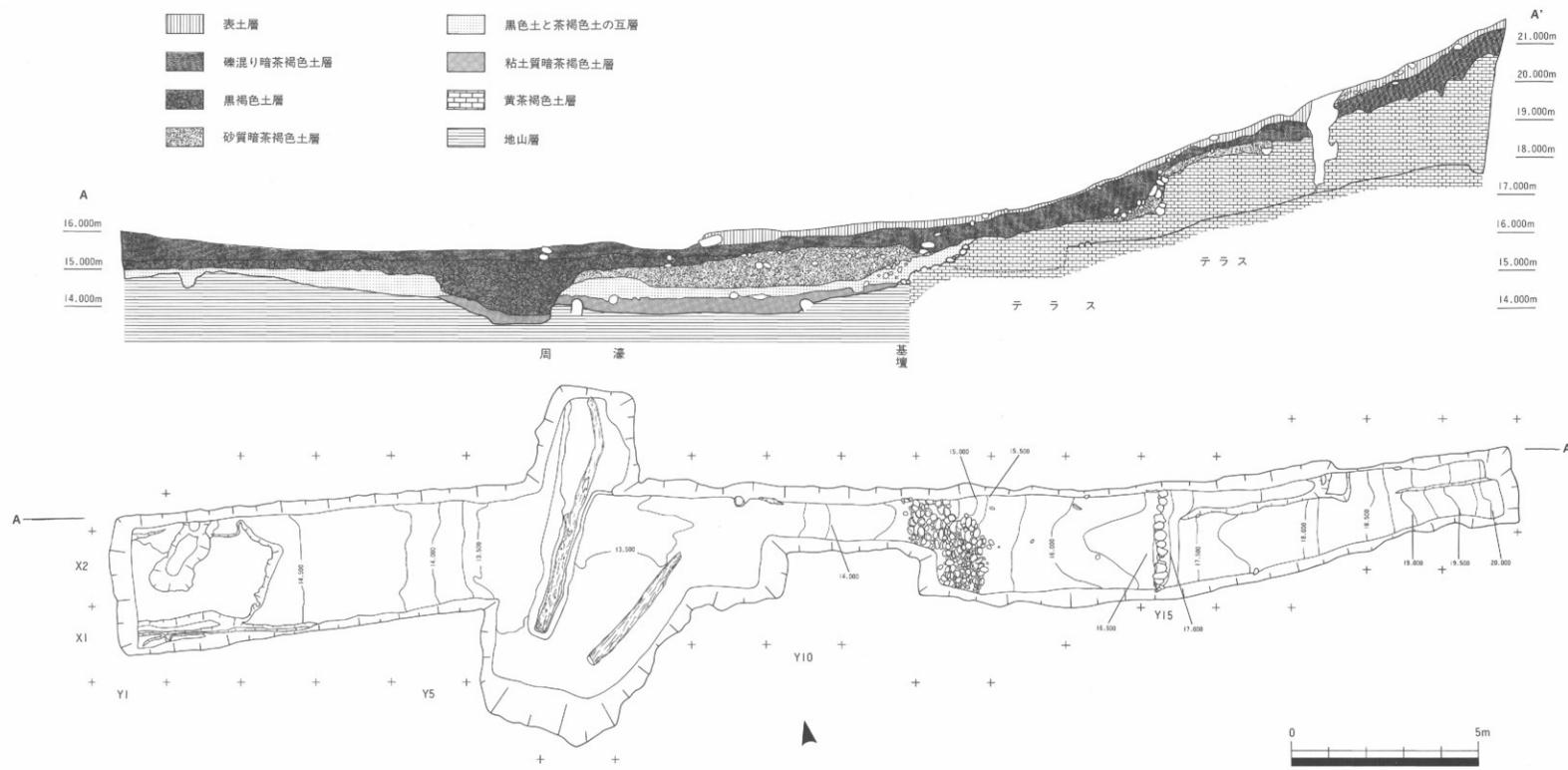
なお、墳丘斜面と福部両方の配石は、石材・大きさ共に古墳本体から検出した葺石と共通しており、近隣に同様な石材を産出する場所が無いことも併せて考えると、あるいは古墳本体3段目斜面に葺かれていた石を転用したとも考えられる。

6. 中世橋状遺構（第3図、図版7）

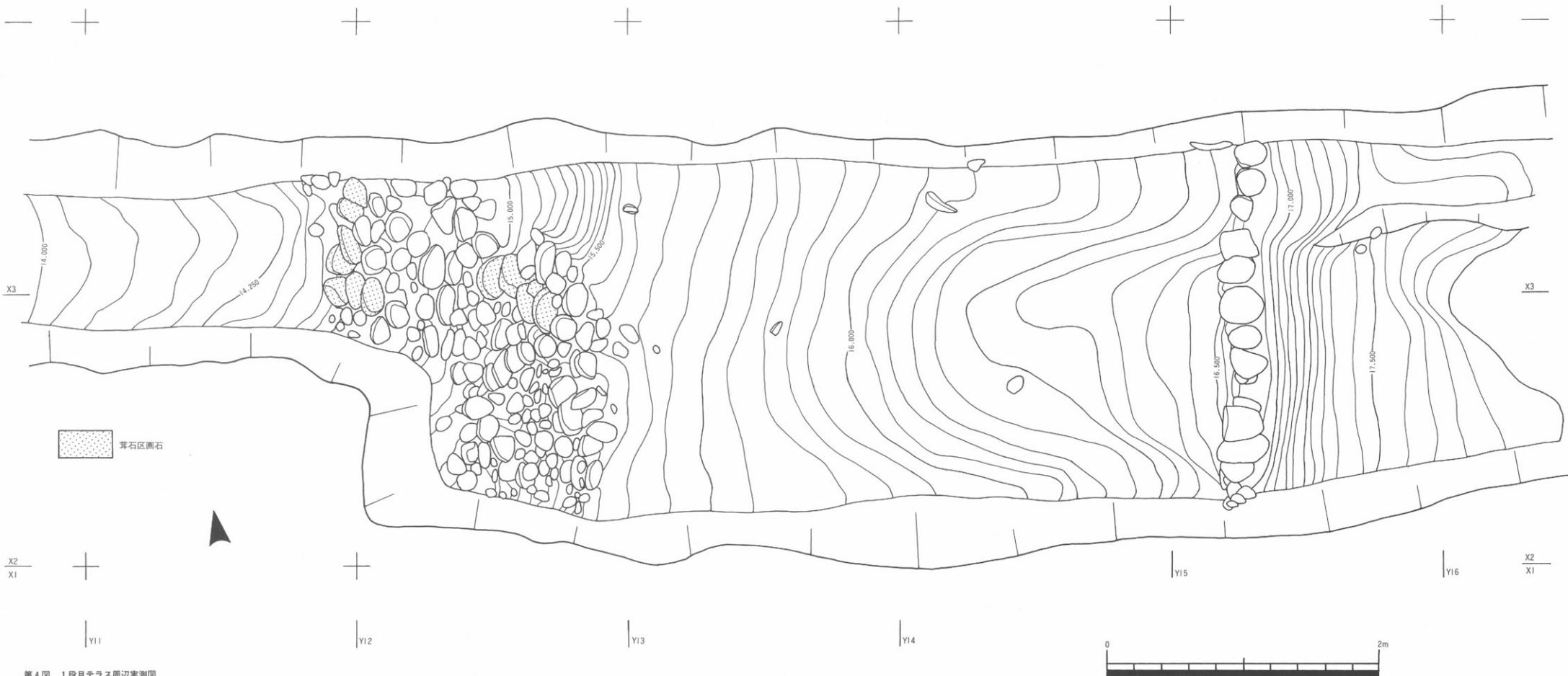
周塗の西側、黒褐色土層の底面近くで、橋状の遺構（木製品）を検出した。長さ約2m、直径20cmの皮付きの木を半裁したもので、平坦面を上にした状態で出土した。両端には削り込み痕があり、単独で使用したものとは考えにくい。中世に掘られたとみられる溝の埋土内から出土したこと、位置が前述した配石遺構に隣接していること等から考えて、中世の窓の周縁に設けられた橋かそれに類するものと推測する。



第2図 地形と区割図



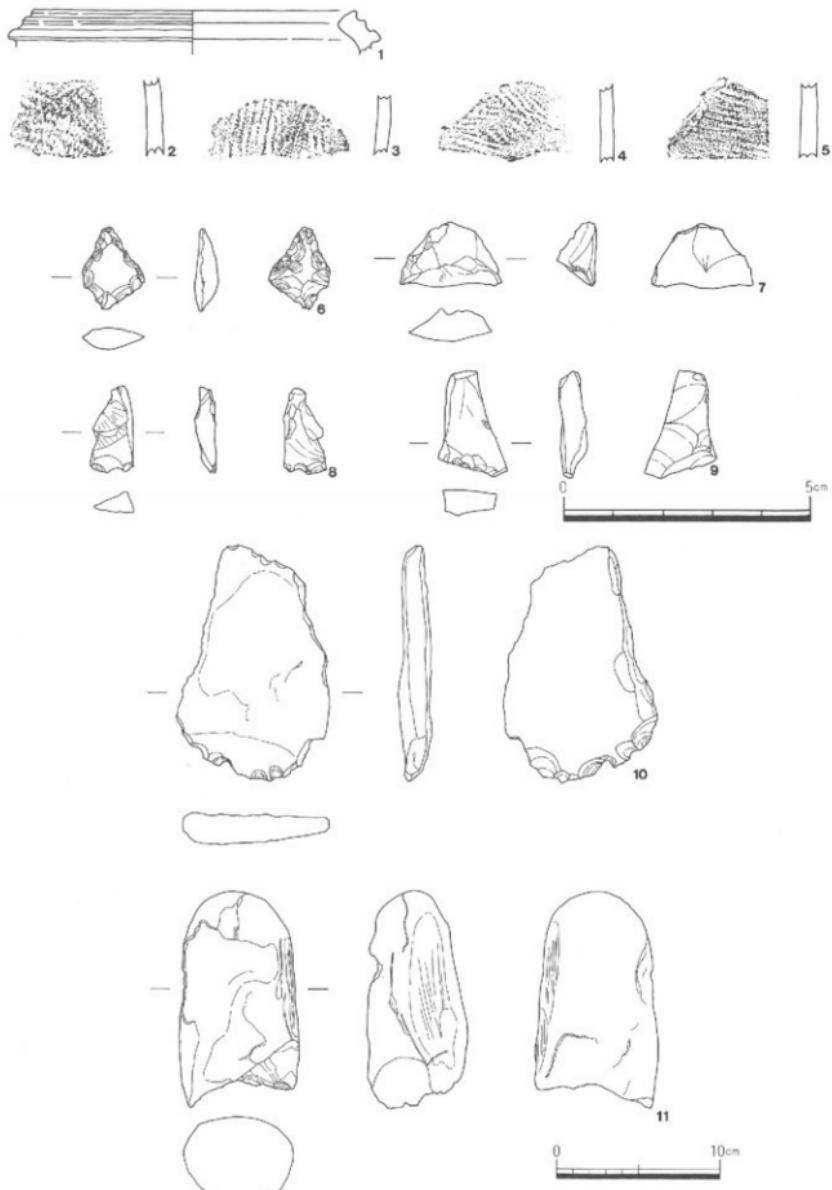
第3図 調査区全体図



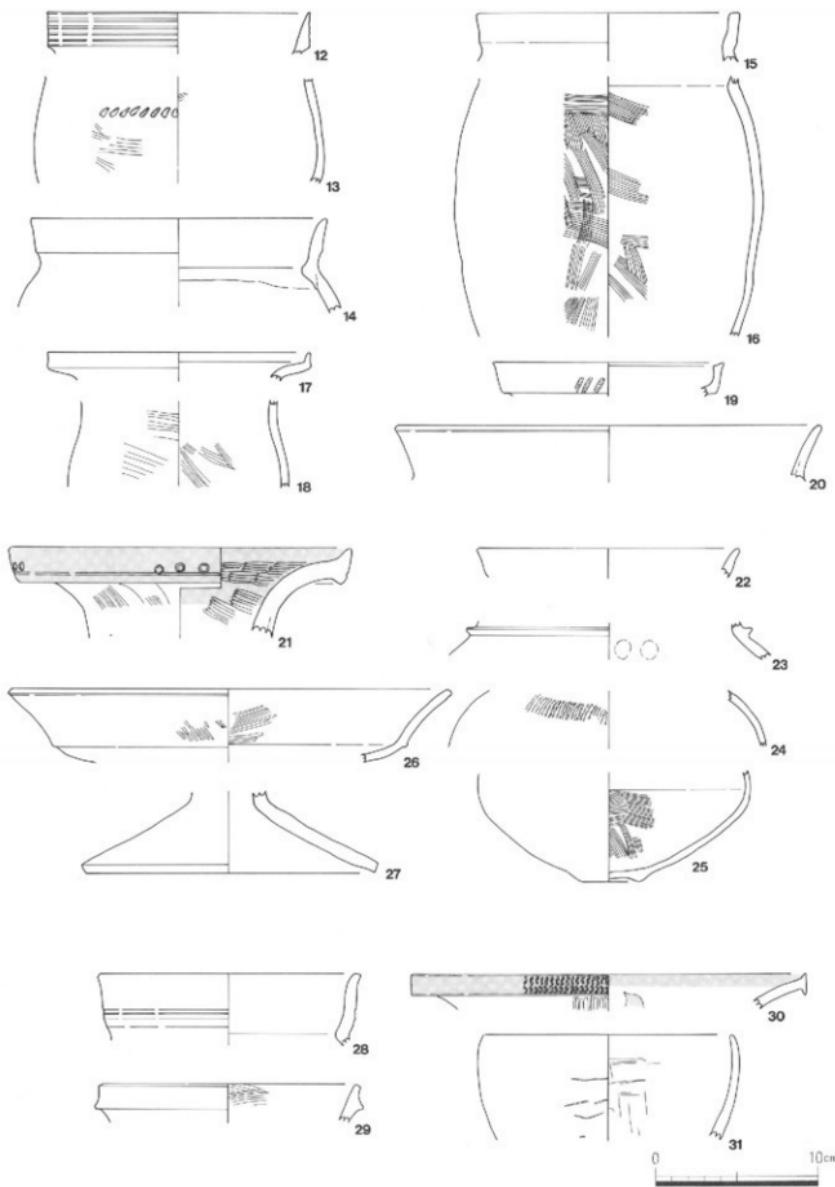
第4図 1段目テラス周辺実測図



第5図 填丘據部配石造構実測図



第6図 遺物実測図



第7図 遺物実測図

7. 出土遺物

a. 土器

(1) 縄文時代の遺物 (第6図1~5)

縄文時代の遺物は、1が表上、3・5が疊混り暗茶褐色土層、2・4が砂質暗茶褐色土層から出土した。

1は内傾する口縁部で、半隆起線文により施文され、中期後葉に属するものと考えられる。波状口縁を有す可能性もある。

2~5は、縄文を施した胴部破片で、全て細かなRL縄文を施している。

(2) 弥生時代の遺物 (第7~8図)

弥生時代の遺物は、ほとんどが墳丘盛土である黄茶褐色土層(12~27)もしくは周塗最下層の粘土質暗茶褐色土層(28~31)から出土したものであり、その他は砂質暗茶褐色土層や疊混り暗茶褐色土層、表土から出土したものである。出土状況は、全般的に小破片での出土が多い。

土器は、全て包含層からの出土であるため、器種ごとに分類した。また、全形を知り得ない器種が多く、分類基準は主に口縁部の形態差によった。

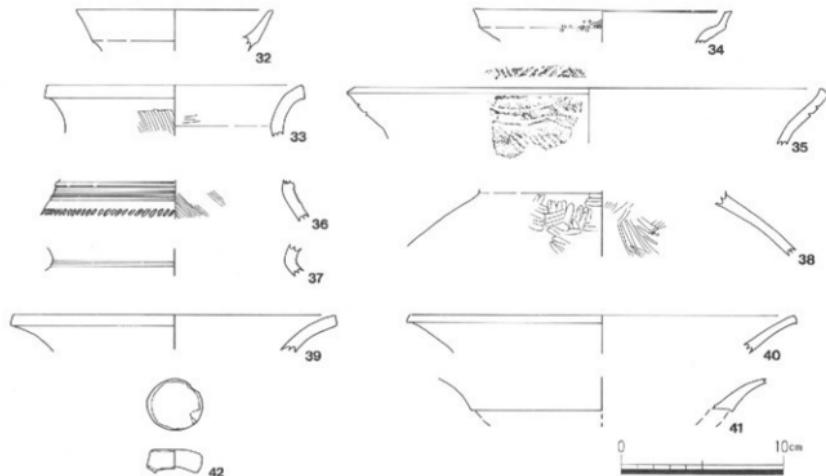
器種は、壺・甕・高杯・有孔鉢・蓋がある。

壺 (第7図21~25・30、第8図38)

21は大きく外反する口縁部に、有段状の口縁帯が付くものである。口縁帯外面下端はわずかに垂下し、内面は屈曲する。口縁帯外面には3つ1セットで円形刺突紋が押印され、口縁帯内外面には赤彩が施されるなど装飾性が豊かである。また口縁帯の円形刺突紋下には浅い擬凹線が1~2条施される。口縁部から肩部外面にかけてハケ目やヨコナデをする以外、外面は全てヘラミガキを行う。法仏II式のものと考えられる。

22は小型壺で、短い口縁部が付く。外面の調整は不明である。

23~25は同一個体と考えられる。下彫れ状の胴部で、平底を呈す。頸部には断面三角形の凸帶、肩部には貝殻複縁



第8図 遺物実測図

紋を施す。胸部内面下端にはハケ目、頸部内面には指頭压痕が残る。法仏II式前後のものと考えられる。

30は東海系統壺と考えられるものである。大きく外反する口縁部に、狭い口縁帯が付くものである。口縁帶外面下端は観く垂下し、内面はわずかに屈曲する。口縁帶外面には刺突紋を綾杉条に2段に施し、口縁帶外面から口縁部内面にかけて赤彩をするなど装飾性が豊かである。また内外面にはヘラミガキを行う。法仏II式のものと考えられる。

38は肩部破片である。外面にはヘラミガキ、内面にはハケ目を行う。

龜（第7図12～20・28・29、第8図32～37）

12は有段擬凹線紋II縁をもつものである。有段口縁は直線的に立ち上がり、浅い擬凹線紋を5条施す。内外面にはヨコナデを行う。月影I式のものと考えられる。

13は12と同一型式と考えられるものである。肩部には刺突紋が施される。外面にはハケ目を行う。12と同時期のものと考えられる。

14は有段無紋口縁をもつものである。有段口縁はわずかに外反して直線的に立ち上がる。また有段部外面の屈曲は弱いが、内面はしっかりと屈曲する。有段部から頸部内外面にかけてはヨコナデ、肩部内外面にはハケ目を行う。12と同じく月影I式のものと考えられる。

15・16は同一個体と考えられ、14と同じく有段無紋口縁をもつものである。ただし口縁部のつくりは雌で、有段部内外面ともにかなり屈曲が弱い。また口唇部上面を面とりする。有段部から頸部内外面はヨコナデ、胸部内外面はハケ目を行う。法仏II式～月影I式のものと考えられる。

17は近江系統の受口状口縁をもつものである。口縁部はしっかりと屈曲し、口唇部は丸くおさめる。内外面にはヨコナデを行う。法仏II式前後のものと考えられる。

18は頸部から胸部上半にかけての破片である。内外面にはハケ目を行う。

19は近江系統受口状口縁壺と有段口縁壺との折衷型である。有段部はわずかに外反して直線的に立ち上がる。有段部内外面は観く屈曲し、口唇部は内傾する面をもつ。また有段部外面には押し引き刺突紋を施す。内外面にはヨコナデを行う。法仏I式～II式のものと考えられる。

20はくの字口縁をもつもので、口唇部外面を面とりする。内外面にはヨコナデを行う。法仏II式～月影I式のものと考えられる。

28は12と同じく有段部擬凹線紋をもつものである。ただし12と比べてつくりが雄で、有段部内外面の屈曲はかなり弱い。また有段部外面には浅い擬凹線紋を2条施す。内外面にはヨコナデを行なう。法仏II式～月影I式のものと考えられる。

29はくの字口縁に、狭い口縁帯をもつもので、口唇部外面を面とりする。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ目を行う。法仏II式～月影I式のものと考えられる。

32は有段無紋口縁をもつ小型のものである。有段口縁は外反して直線的に立ち上がる。また有段部内外面はしっかりと屈曲する。有段部から頸部内外面にかけてはヨコナデ、肩部内外面にはハケメ目を行う。14と同じく月影I式のものと考えられる。

33はいわゆる能登型甕で、くの字口縁をもち、口唇部外面を明瞭に面とりする。頸部内外面にはハケ目、口唇部附近にはヨコナデを行う。月影I式のものと考えられる。

34は近江系統の受口状口縁をもつものである。口縁部はしっかりと屈曲し、口唇部上部に面をもつ。また受口部外面に刺突列点紋をもつ。法仏I式～II式のものと考えられる。

35は天王山式系統のものである。内湾ぎみに外反するくの字口縁をもち、口唇部を面とりして、そこに刻目を施す。口縁部外面はR Lの繩文地に2段の連弧状の沈線を施す。中期後半のものと考えられる。

36・37は同一型式と考えられるもので、壺の可能性も考えられる。36では頸部に弱い凸帯、肩部に5条の横描直線紋と刺突紋を施す。37では頸部に4条の横描直線紋を施す。法仏II式～月影I式のものと考えられる。

高杯（第7図26・27、第8図39～41）

26は杯部が屈曲して、短く外反する口縁部をもつものである。口唇部には外傾して面とりをする。内外面にはヘラミガキを行う。法仏II式のものと考えられる。

27は高杯の脚裾部である。脚裾部はハの字状に直線的に開く。また裾端部には明瞭な面をもつ。内外面の調整は不明である。26と同時期のものと考えられる。

39・40は外反する口縁部をもち、口唇部には外傾して面とりをする。内外面の調整は不明である。

41は杯部屈曲部の破片で、口縁部が体部から剥がれたものである。内外面の調整は不明である。39～41はいずれも26と同時期のものと考えられる。

有孔鉢（第7図31）

体部が内湾ぎみに立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。外面には継ぎ目痕を残す。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面にはハケ目を行う。他の遺物と同じように法仏II式～月影I式の幅で捉えられるであろう。

壺（第8図42）

つまみ部の破片である。つまみは、短い円筒状で上面は凹まず、平坦である。他の遺物と同じように法仏II式～月影I式の幅で捉えられるであろう。

（3）奈良時代の遺物（第9図43・44）

須恵器杯がある。砂質暗茶褐色七層から出土した。

杯B（43・44）

43は口縁部破片である。口径は約9cm。口縁端部がやや内湾ぎみに立ち上がるるもので、口唇部は尖りぎみに丸くおさめる。内外面にはロクロナデを施す。焼成は還元硬質である。9世紀のものである。

44は杯底部の破片である。底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。高台は床との接置面に浅い溝がめぐり、内端部がやや上がる。底部内面にはロクロナデによる凹凸がある。焼成は還元硬質である。9世紀のものである。

（4）中世以降の遺物（第9～11図）

珠洲焼・土師皿・越中瀬戸・瓦器などがある。これらは砂質暗茶褐色土層（45～56）から出土したものと、礫混り暗茶褐色土層（57～161）から出土したものに大別できるであろう。その他は表土から出土したものである（162～173）。これらはどの層もカク乱を受けていると思われ多様な遺物が出土している。ただし、礫混り暗茶褐色土層からは多量の土師皿がまとまって出土しており注目できる。さらに、その中でも墨書きを施した土師皿が多いのは特筆できることであろう。

珠洲（第9図47・48・57～59、第11図152～156・162）

甕（47・57～59・152・156・162）

162は頸部から肩部にかけての破片で、外面に粗い平行叩き目を行い、外面全面に自然釉がかかる。また頸部内面にヨコナデを行う。59・156は底部破片で、粗く浅い平行叩き目が施される。また底部は砂底成形である。47・57・58・152は体部破片で、比較的細かい平行叩き目が施される。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。甕は全て珠洲V期前後のものと考えられる。

壺（153～155）

全て体部破片である。154・155は外面に細かい綾衫状叩き目を施し、内面に当て具痕を施す。珠洲II期のものと考えられる。153は外面の粗い綾衫状叩き目を施し、内面の当て具痕を丁寧にナデ消している。珠洲V期前後のものと考

えられる。

すり鉢 (48)

体部破片である。内面にはやや細かく浅いおろし目が施される。珠洲V期のものと考えられる。

土師皿 (第9図45・46・53~55・60~80、第10図81~151、第11図163・164)

土師皿は全て手捏ね成形による。墨書きを施すもの(60~64)。口径7cm以下の小型のもの(65~92)。口径8cm前後の中型のもの(45・93~124・163・164)。口径9cm以上の大型のもの(46・54・125~151)。口径14cmの特大型のもの(55)に大別できる。

墨書きを施すものでは、60は内面に「升」の文字がある。文字は細く繊細な筆使いである。62は内面に「往」の文字がある。その下側には「ネ」偏が見えるが、判読できない。また外面にも墨書きが施されるが、判読できない。文字はやや太目である。64は底部内面に花と考えられる墨書きがある。細く繊細な筆使いである。61・63の内面にも墨書きが施されるが、文字の判読はできない。

土師皿の時期に関しては、65は口縁部上半をヨコナデして、明瞭に外反させるもので、内面に弱い棱が入る。内面にはナデ調整を施す。また口縁部端にはわずかにタール状のものが付着する。16世紀中葉のものと考えられる。

61・88・93・146は口縁部上半をヨコナデして、直線的にわずかに外反させるものである。16世紀末のものと考えられる。

107・131・133・139は口縁部上半をヨコナデして、直線的に仕上げるものである。16世紀末~17世紀初頭のものと考えられる。

その他の土師皿は、口縁部上半のヨコナデの有無や口唇部端面の成形法などによって、さらに細分可能であるが、全般的に口縁部上半が内湾し、器壁が薄く、灰白色の色調を呈するなどの特徴をもつ。これらの土師皿は上記のものと比べて新しく、近世のものである。

越中瀬戸 (第9図49・50・56、第11図158~169)

皿 (50・166・167)

全て底部破片である。50は高台を削り出して、断面三角形に仕上げている。体部内面に灰白色に発色する釉を施す。166は高台を削り出して、断面三角形に仕上げている。体部内外面には黒色に発色する鉄釉を施す。167は平底で、回転糸切り痕を残す。

天目茶碗 (49・158)

49は底部破片である。高台は断面逆台形に仕上げている。体部内面と外部上半には黒色に発色する鉄釉を施す。158は口縁部から体部にかけての破片である。やや内湾しながら直立する口縁部で、口唇部を丸くおさめる。体部内外面には茶褐色に発色する鉄釉を施しているが、一部は黒色に発色する。

匣鉢 (159・160・165・168・169)

158は口縁部破片。それ以外は底部破片である。159・169は平底で、回転糸切り痕を残す。底部と体部内外面には茶褐色に発色する鉄釉を施す。160は平底で、回転糸切り痕を残す。内外面は施釉していない。168は平底で、ヘラ切り後ナデ調整をしている。内面には茶褐色に発色する鉄釉を施す。蓋の可能性も考えられる。

陶鍋 (56)

ほぼ完形のものである。器高3.4cm、孔径約2.0cmを測る。内外面には茶色に発色する鉄釉を施しているが、一部は暗緑色に発色する。

唐津 (第11図157)

底部破片である。高台は削り出して、断面逆台形に仕上げている。内底面には3個の胎土目痕を残す。底部外面か

ら体部外面下半には茶色に発色するさび釉、体部上半と内面には暗緑色に発色する釉を施す。また内底面には黄茶色に発色する釉を施す。16世紀末のものと考えられる。

肥前（第9図51）

体部破片である。外面には青色に発色する紋様を施す。また内外面には釉を施している。17世紀後半～18世紀初頭のものと考えられる。

伊万里（第11図161）

底部破片である。外面には斜格子紋や連弧状の紋様、直線紋を施す。内面には直線紋を施す。また見込部には斜格子紋を施す。

瓦器（第11図170）

口縁部が直立ぎみに立ち上がり、口縁部上半を短く外反させるもので、口唇部上面に面をもつ。また口縁部上半は器壁がかなり厚くなる。

不明近世陶磁器（第9図52、第11図171～173）

171は鉢と考えられる。口縁部を強く外反させ、口唇部外面を面とりする。内外面は暗茶色に発色する釉を施す。172は大型の鉢と考えられる。口縁部を強く外反させ、口唇部外面を面とりする。内外面は暗緑色に発色する釉を施す。

173も大型の鉢と考えられる。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部を肥厚させる。内外面は暗茶色に発色する釉を施す。

b. 石器（第6図6～11）

石鎌（第6図6）

X 2・Y 7の粘土質茶褐色土層から出土した有茎凸基式石鎌であり、先端を欠損する。残存長34mm、最大幅26mm、最大厚9mm、残存重量5.5g。石材は鉄石英である。

剣片（第6図7～9）

7はX 3・Y 6の黄茶褐色土層から出土した。最大長42mm、最大幅26mm、最大厚15mm、重量11.9g。石材は鉄石英である。

8はX 2・Y 3の疊混り暗茶褐色土層から出土した。最大長36mm、最大幅17mm、最大厚7mm、重量3.1g。石材はチャートである。

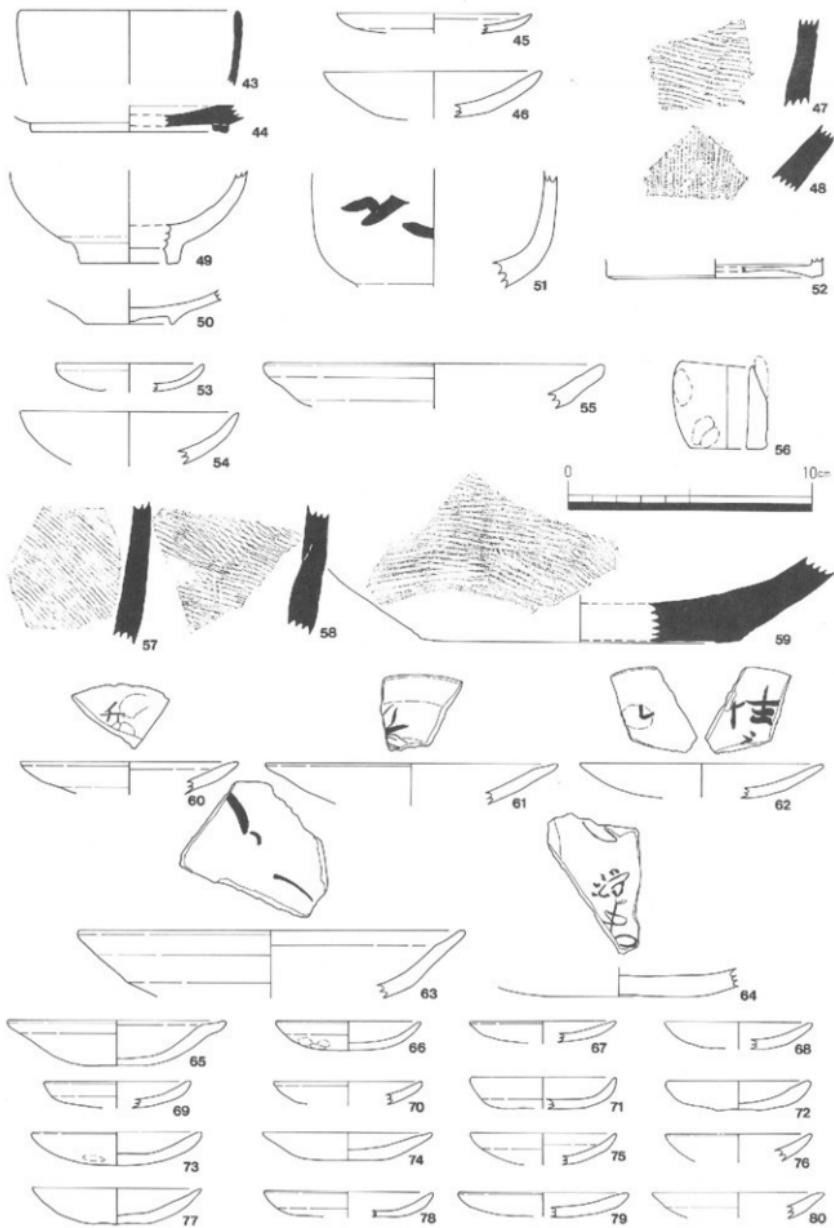
9はX 2・Y 4の疊混り暗茶褐色土層から出土した。最大長44mm、最大幅25mm、最大厚1.1mm、重量13.9g。石材は鉄石英である。

打製石斧（第6図10）

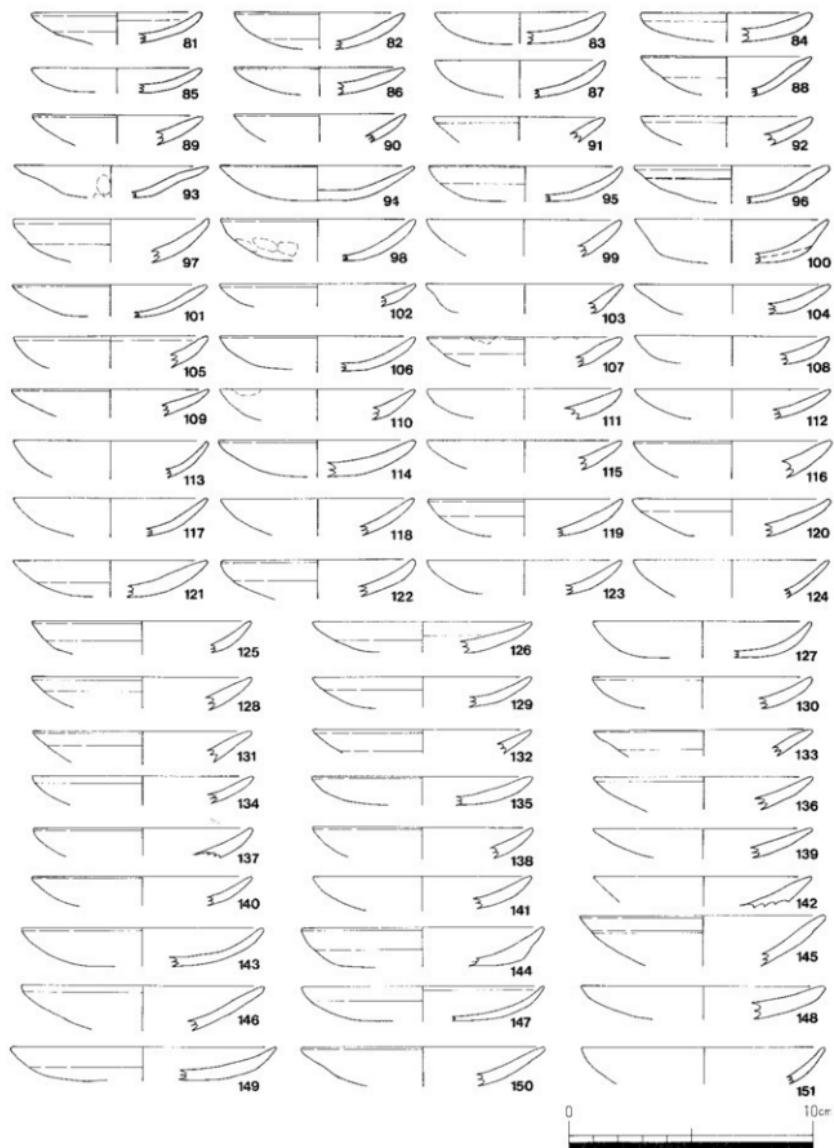
X 2・Y 3の疊混り暗茶褐色土層から出土した打製石斧の欠損品である。残存長14.4cm、残存幅9.2cm、残存厚16mm、残存重量284.5g。石材は安山岩である。

用途不明品（第6図11）

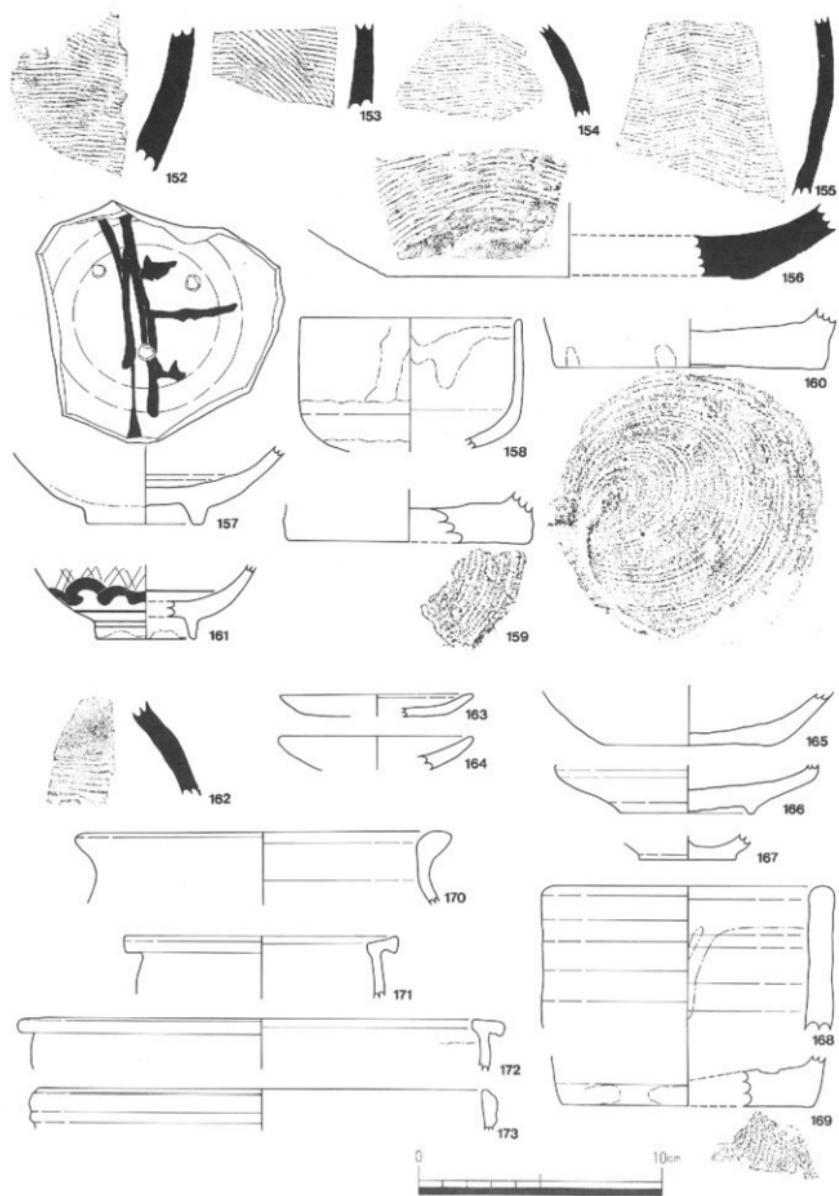
X 2・Y 8の疊混り暗茶褐色土層から出土した。表面の風化・剥離が著しい。石材は安山岩である。



第9図 遺物実測図



第10図 遺物実測図



第11図 遺物実測図

IV. 調査成果

稚児塚古墳について

今回の調査で得られた新知見は以下の通りである。

①古墳の推定規模は、墳丘の直径46m、高さ約6m、3段築成と考えられる円墳で、墳丘の殆どが盛土によって築かれている。

②墳丘の周囲には、幅約17mの周濠があげぐる。

③墳丘1段目斜面は斜面長約2m、高さ約1.2mで、葺石が施されている。

④2段目斜面にあたる部分には、高さ約60cmの石垣状遺構が築かれている。

⑤墳丘1段目テラス上には、基部長3.4m、同幅3.4m、高さ15~30cmの墓道が築かれている。

このように、稚児塚古墳は県内最大かつ、周濠・葺石といった複数の外部施設を持つ県内唯一の円墳である。3段築成の古墳は、北陸では他に能登の宮ノ山古墳が知られているのみで、全国的にも稀な存在といえる。また、円墳において墓道が検出されたのは全國初で、古墳における祭祀のあり方を考えるうえで重要な遺構といえよう。

昭和63年に実施した跡跡詳細分布調査の報告書では、稚児塚古墳の測量調査から、畿内を中心とする政治体制が北陸東部にまで及んでいたと推論しているが(田島 1989)、今回の調査においても、円墳という形態と40m台という規模には不釣り合いな外部施設が検出され、この推論をより強く裏付ける結果となった。

なお、古墳築造時期を示す遺物は今回の調査でも出土しなかったが、今のところ構造等から5世紀中~後葉と考えるのが妥当であろう。

周辺古墳との関連について

稚児塚古墳は、標高15mの平野部水田中に所在する。一帯は常願寺川によって形成された扇状地扇端部、白岩川水系の中流域にあたり、古墳の立地する微高地も白岩川の支流寺田川に面する。

白岩川水系の中流域から下流域にかけては傾斜が緩く、その豊富な水量を利用した水稻耕作や水運が盛んであった。立山町社や上市町江上にある弥生時代の大集落は、このような条件下で成立したものである。一帯が、県東部で唯一、平野部に大型古墳が築かれた地域であるのも、このような地理的環境によるものであろう。

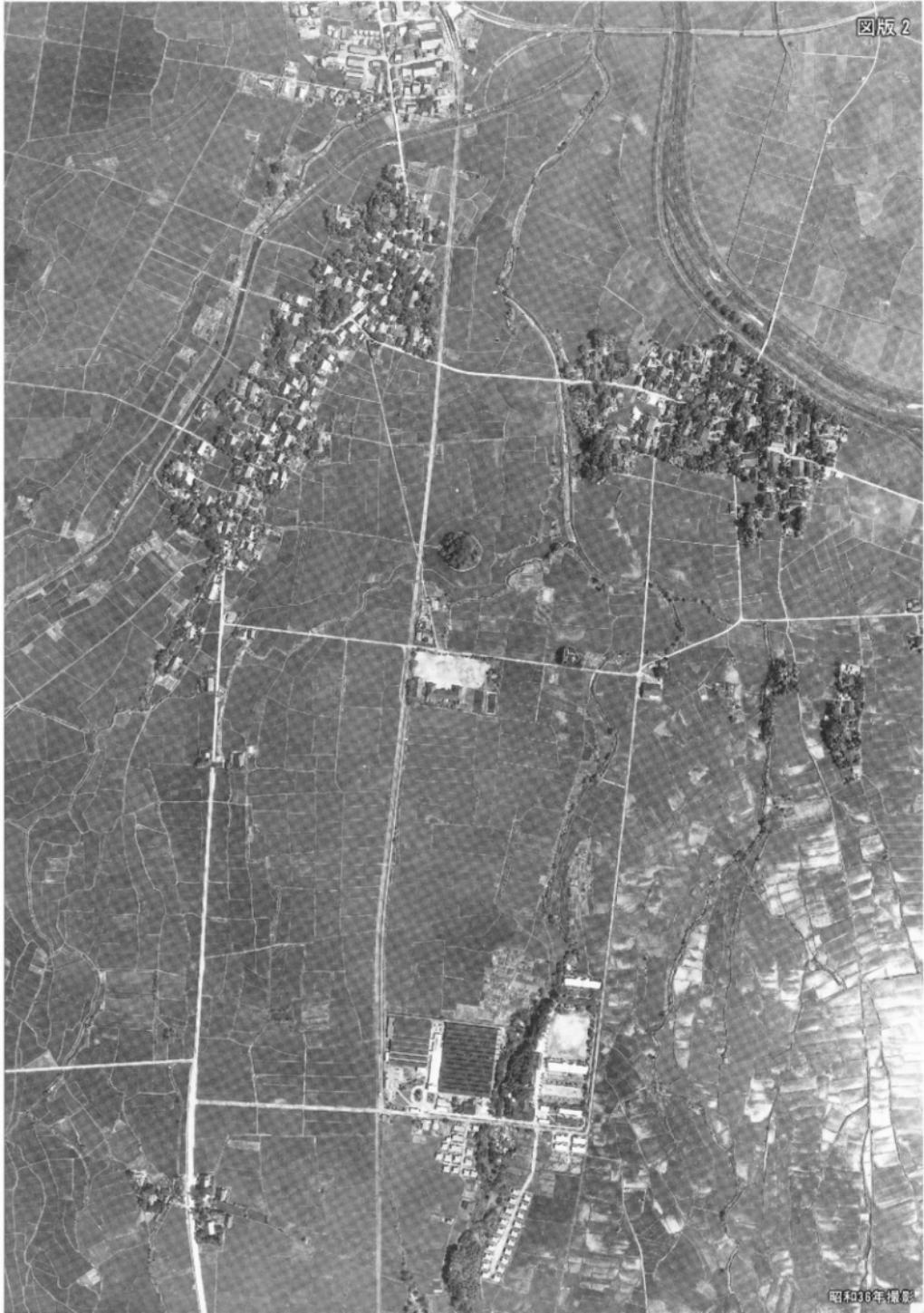
古墳は平野部のみに築かれたわけではなく、白岩川中流左岸の段丘端には藤塚古墳があり、白岩川の支流大岩川右岸の丘陵尾根上には、前期古墳とされる柿沢古墳群も存在する。これらの古墳は、このような分布状況と歴史的環境からみて、相互に関連を持つものと考えられ、一連の古墳群として捉えられるべきであろう。以後、これを「白岩川流域古墳群」と呼称したい。この白岩川流域古墳群の築造者について、現時点では古墳及び同時代遺跡の調査が進展していないこともあり、全く未知の状況にある。

今後は、古墳の築造時期と築造者(被葬者)の比定が最大の課題であるが、周辺の古墳・遺跡との関連も考慮して調査を進める必要がある。

参考文献

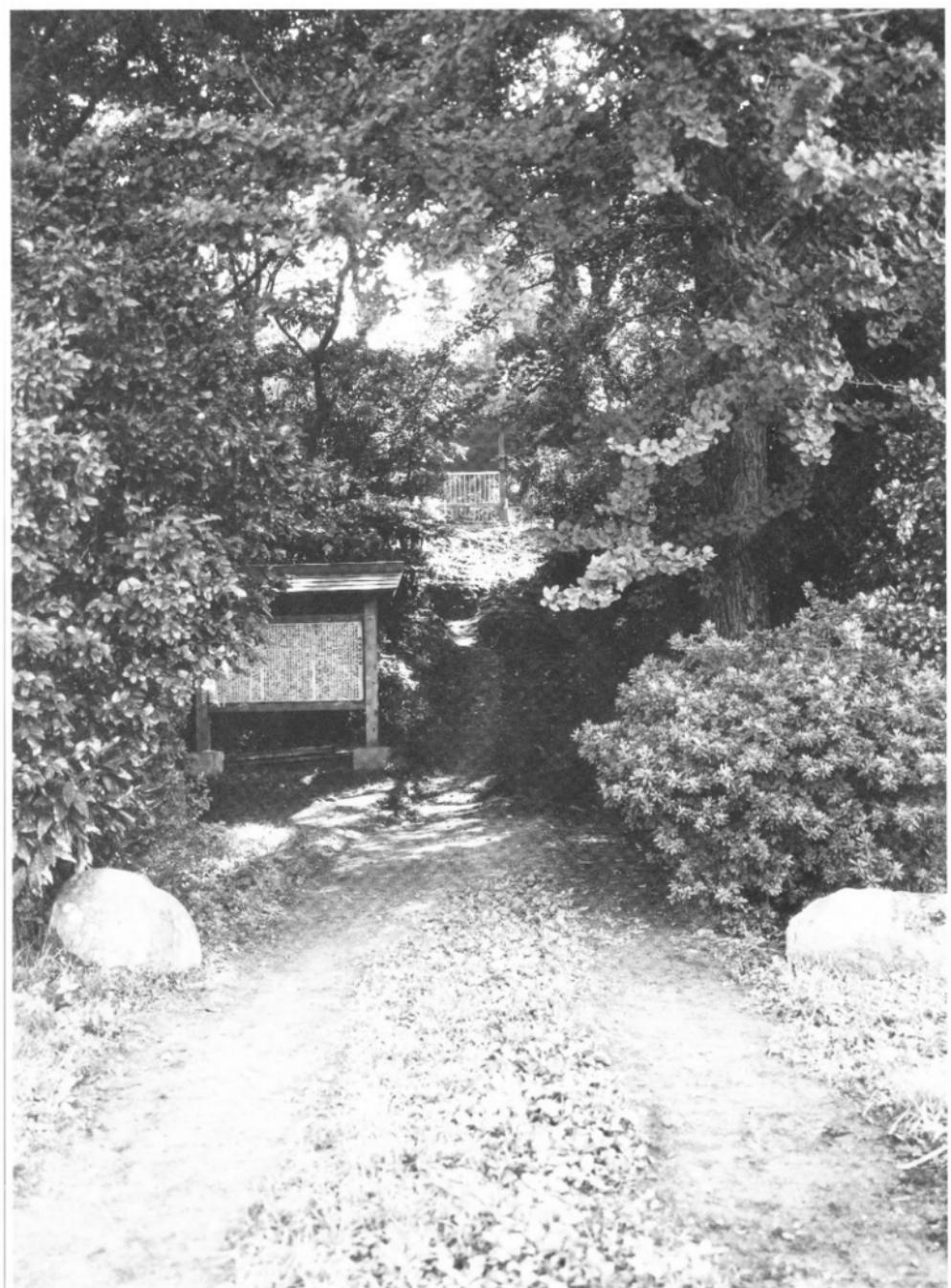
- イ 石塚久則 1992 「3 外部施設、2 莖石」『古墳時代の研究 第7巻』雄山閣出版
- 石原与作 1956 「白岩川中流域の歴史的事実－弓庄・寺田郷の研究－」
- 一瀬和夫 1992 「3 外部施設、1 周濠」『古墳時代の研究 第7巻』雄山閣出版
- 岩崎卓也 1992 「1 總論」『古墳時代の研究 第7巻』雄山閣出版
- オ 小矢部市教育委員会 1986 『若宮古墳』
- 小矢部市教育委員会 1988 『谷内16号古墳』
- カ 鹿西町教育委員会 1993 「雨の宮古墳群－環境整備事業に係る第1次発掘調査概報－」
- 上市町教育委員会 1981 「富山県上市町弓庄城跡－緊急発掘調査概要－」
- 上市町教育委員会 1982 「富山県上市町弓庄城跡－第2次緊急発掘調査概要－」
- 上市町教育委員会 1983 「富山県上市町弓庄城跡－第3次緊急発掘調査概要－」
- 上市町教育委員会 1984 「富山県上市町弓庄城跡－第4次緊急発掘調査概要－」
- 上市町教育委員会 1985 「富山県上市町弓庄城跡－第5次緊急発掘調査概要－」
- 上市町教育委員会 1993 「富山県上市町柿沢古墳群－第1次測量調査報告－」
- 加悦町教育委員会 1981 「後野円山古墳群発掘調査報告書」
- ク 久々忠義 1979 「3 稚児塚古墳」『富山県立山町埋蔵文化財子備調査概要』立山町教育委員会
- シ 白石太一朗 1985 『古墳の知識 墳丘と内部構造』東京美術
- タ 田島富溢美 1989 「第3章 北陸における大型円墳の規模とその意義」『立山町埋蔵文化財分布調査報告書』立山町教育委員会
- 立山町教育委員会 1987 「辻遺跡・浦川遺跡発掘調査概要」
- 立山町教育委員会 1989 「立山町埋蔵文化財分布調査報告書IV」
- 立山町教育委員会 1991 「辻遺跡－第3次発掘調査報告書－」
- ツ 都出比呂志 1992 「2 古墳の墳丘、1 墳丘の形式」『古墳時代の研究 第7巻』雄山閣出版
- ノ 野毛大塚古墳調査会 1992 「野毛大塚古墳－第4～6次調査概報－」
- フ 福井市教育委員会 1993 「劍大谷1号墳発掘調査報告書」
- ヤ 安田良栄 1977 「郷土のあけぼの」『立山町史』上巻
- リ 立命館大学文学部学芸員課程 1987 「立命館大学文学部学芸員課程研究報告第1冊－鳴谷東1号墳第1次発掘調査概報－」
- 立命館大学文学部学芸員課程 1989 「立命館大学文学部学芸員課程研究報告第2冊－鳴谷東1号墳第2次発掘調査概報－」







図版 3 稲堀塚古墳航空写真（富山県公文書館提供）



図版4 調査前全景（西から）



1

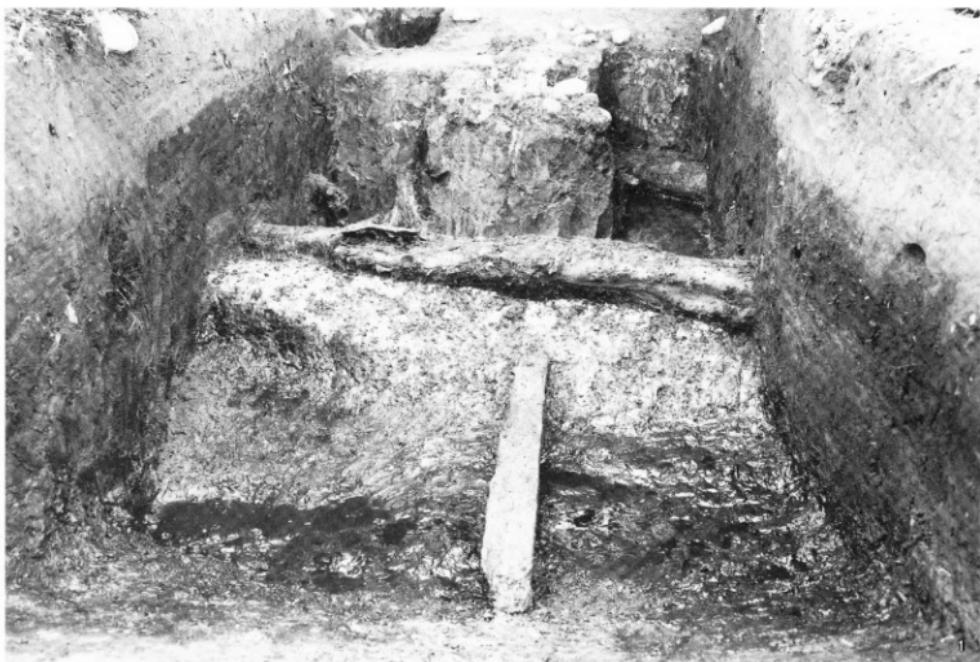


2

図版5 墳丘斜面配石造構 1. 墳頂付近（南から） 2. 斜面中段（西から）



図版 6 墳丘裾部配石遺構（西から）



図版7 中世橋状造構 1. 西から 2. 南から



図版 8 填丘完掘全景（西側周濠内から）



図版 9 1段目テラス周辺近景（西から）



1

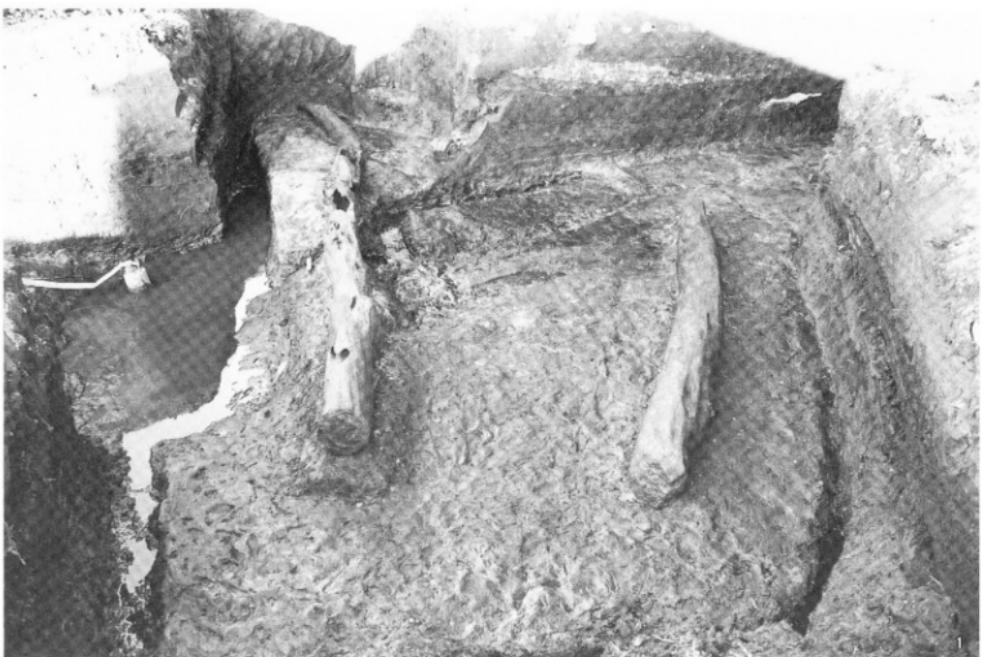


2

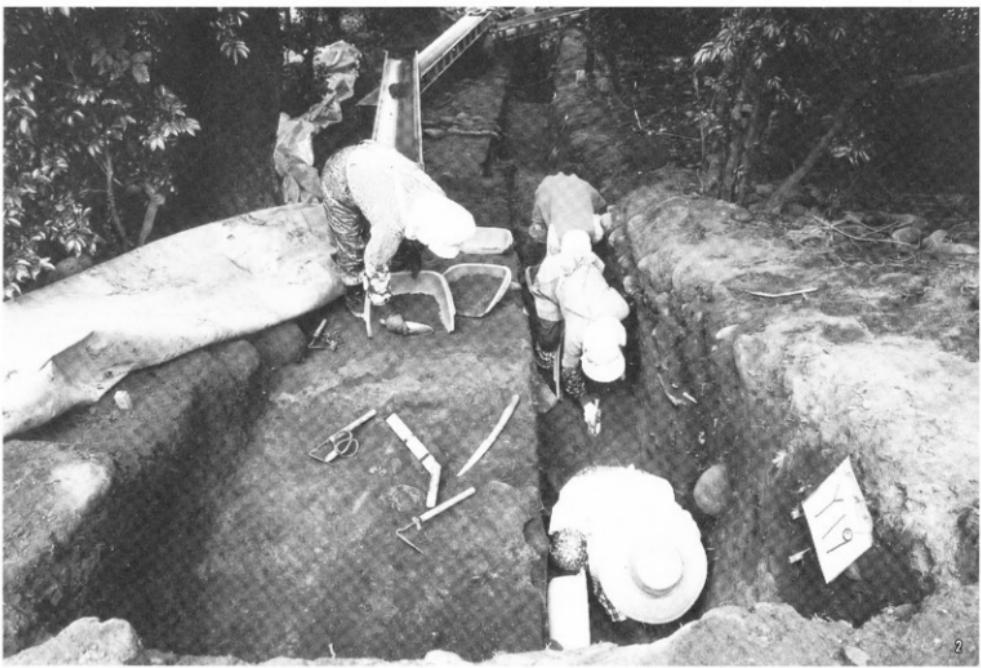
図版10 石垣状遺構 1. 石段（中世か？）と列石 2. 石段撤去後



図版11 調査区全景（西から）

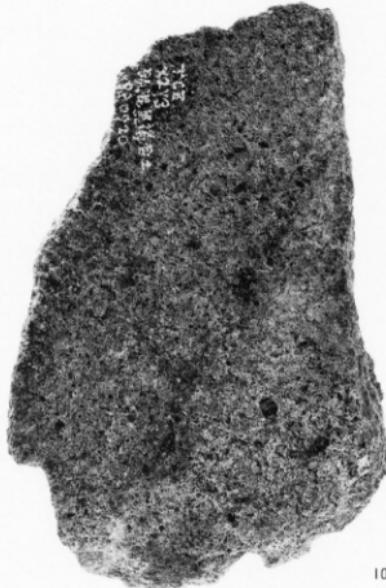
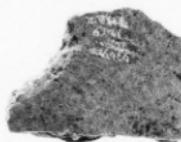
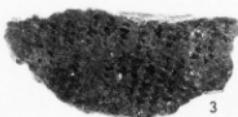
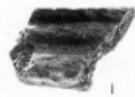


1



2

図版12 1. 拡張区全景（南から） 2. 調査風景



図版13 遺物写真



図版14 遺物写真